

【課題研究】ご論題「起観生信」の今日的意義

一.はじめに

ご論題「起観生信」の義相釈義の代表的なものに、「観行発生信心」「観行生長信心」と「起観即生信」の三義がある。興味深いことに、今も三義の何れか一義を選んで他を廃捨されることはない、大変有り難いことである。なぜなら、高祖の弘願門のみ教えの表現構造について時代や環境に照らして衆生に受け取り易いように見直す契機を示唆して下さっていると頂戴することができるからである。

さて、浄土往生の実践道たる『浄土論』の『註論』には、浄土願生の菩薩相應の行として止観中心の五念門行が説かれる一方に於て、讃嘆門に示された無礙光如来の名を称する行が凡夫相應の往生行と示されている。後者が本願力回向の行信に基づく往生行である。よって、本ご論題の釈義を頂戴するに際しては本願力回向の行信に則してお導きに与ることになる。

しかるに、善譲師のお言葉通り、まさに「この題解釈^{たやす}輒からず」(Ref p63)、敢えて、その困難な取組に挑戦致す所以は、縦令、微力なりとも現代社会に弘願のみ教えをお伝えする上で、有効な論理的可能性を発掘し、以て、ご論題「起観生信」の今日的意義を見出すことを目的とするにある。

二.出拠

- ・『浄土論』『論註』「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」(Ref 七註 p31,86)、
- ・『往生論註』「不虛作住持功德成就」(Ref 七註 p130-1)、
- ・『一念多念文意』「観仏本願力以下(『浄土論』)」の釈(Ref 註 p691、同脚注)、
- ・『一念多念文意』「今信知弥陀本弘誓願(『礼讃』)」の釈(Ref 註 p693-4)、
- ・『教行証文類』「化身土文類」「諦観彼国浄業成者」の釈「本願成就の尽十方無碍光如来を観知すべしとなり」(Ref 註 P382)

三.観の構造

『往生論註』に示された「観の構造」

- ・「起観生信とは、この分のなかにまた二重あり、一には五念力を示す、二には五念門を出す」(Ref 七註 p100)。当該御文のみでは内容は明解でない(Ref p181)。
- ・御文は「観を起して信を生ずる」と素朴に読み下せる。
- ・その「観」とは何かと問えば、「起観生信章」に「毘婆舍那」を訳して「観」といふ。(中略)また二の義あり。一には、ここにありて想をなしてかの三種の莊嚴功德を観ずれば、この功德如実なるがゆゑに、修行するものもまた如実の功德を得。(以下略)」とある(Ref 七註 p106)。

『観経疏』に示された「観の構造」

「観」といふは照なり。つねに浄信心の手をもって、もって智慧の輝ひかりを持ち、かの弥陀の正依等の事(=依正二報)を照らす(Ref『観経疏』『玄義分 釈名門』七註 P304)。

高祖の観の義

(一)『教行証文類』『化身土文類』『諦観彼国浄業成者』の釈「本願成就の尽十方無碍光如来を観知すべしとなり」(Ref 註 P382)とある観知(信知)。

高祖の語彙ではないが「観達」もまた、同義とされる。

(二) 和語のご解釈(Ref『一念多念文意』の釈)

・ア)『浄土論』『観仏本願力』の釈

「佛の本願力を観ずるに、(中略)「観」は、願力をころにうかべみると申す、またしるといふころなり(Ref 註 p691)。「観ずる」のご左訓に、「みるなり、しるころなり」とあり、ここでは本願力を信知することの意とみられた」とある(Ref 註 p691 脚注)。

・イ)『礼讃』『今信知弥陀本弘誓願』の釈(Ref 註 p693-4)

如来のちかひを信知すと申すころなり。「信」といふは金剛心なり、「知」といふはしるといふ、煩惱悪業の衆生をみちびきたまふとしるなり。

また「知」といふは観なり、ころにうかべおもふを観といふ、ころにうかべしるを「知」といふなり」とある(Ref 註 p694)。

尚、「浮かべる」の性格は、意業であり、容易に伺い知ることのできない深遠な奥義を脳裏に見える化(Visualize)する意かと窺われる。

先哲の観の分類(Ref P132)

玄義分の「観」を「観照」といい、起行に約し、「観知(信知)」は、安心に約するとして両者を差別する。高祖『一念多念文意』の「うかべおもふ、うかべみる」は、観照に、「うかべしる」は、観知と配当されている。意業・智業は、起行について云われる。

観照	玄義分	起行	うかべおもふ、うかべみる
観知	化巻-観経-隠彰義	安心	しる、うかべしる

四、起観生信の義相各釈義について

(一)起観即生信(観即信)の義(義山師等)

【題意】

本義は、本願力を観知して(初起観)一心願生の信心(初起の信心)を発生する義である。

【釈名】

「観」とは、観知(信知)であり、安心に約する(Ref P128(132))。

「信」は、初起の信心であり、「発生」は、初起の信心を生ずることをいう。

【義相】

(一)観を安心に約する理由

(理由)『浄土論』「願生偈」は、「帰敬頌」の「世尊我一心 帰命尽十方 無礙光如来 願生安楽国」に照らし、偈頌全体に亘って“ただ一心”を顕す書とみて、その大意(願偈大意)をうけて起観生信を釈するものという釈義だからである(Ref P69(71))。

(二)観と信との関係

観というも信の外はないから、初起の「観」と初起の「信」とは、“体一異名”であるとする。観と信の関係は成就文の「聞即信」と同趣であるとする。

(三)観知の仕組み

不虛作の本願力に観達(=観知)して、一心願生する意であるとする(Ref『論註』七註 p131)

(四)後続観との差別

したがって「信」は、「初起の信心」であり、専ら「安心」の次元でみる以上、「観」もまた初起観でみることができ、このため、後続観とは差別するとされる

【論点:観即信義における懸念について】

Q 観照と観知に差別を設けるべきか否か

A 設ける必要性に乏しいと窺う。

「観」について高祖は、『一念多念文意』に『浄土論』の「観仏本願力」を釈して「観」は、願力をこころにうかべみると申す。またしるといふころなりとお示し下さっている。

・「しる」については、意業()の趣きを顕す「うかべ」を取り込んだ「うかべしる」という礼讃文釈もある以上「うかべみる」と「しる、うかべしる」に格別の差別を設ける必要性に乏しいかと窺う(Ref『一念多念文意』註 p694)。 (Ref p25)。

Q 「観」を専ら「安心」次元で見る(「起行」を捨象する)ことの是非

A 「観」を行に非ずとするのは無理があると窺われる。

(理由)諸先哲方の見方や、参考図書には枚挙にいとまがないからである。

・ア)本義に立つといわれる義山師自らの指摘「起観生信」とは「起信生信」とし、観を行に非ずとするのは首肯し能はざる(Ref 義山師 p69(71))、

イ)「観は、聞に同じと雖も、聞は行名に非ず、観は全く行名なり」(Ref 善讓師 P62(64), p26))

ウ)うかべみる、うかべおもふ、うかべしるはあっても、うかべきく、うかべたのむの用例はない(Ref 善讓師 P62(64)、 p25)。

エ)「願生偈は、一心宣布に論主の釈功ありとするも、その信心発生は、五念門に基づくと大師が捉えていらっしゃる」との指摘(Ref P73)。

オ)元来、五念門の門とは、阿弥陀仏の浄土に往生するための行であった(Ref 七註巻末註)。

Q 観と聞との対比考察からいえること

「佛願の生起本末を聞くこと」と「願力をこころにうかべみること」と

ウ)本義では、観即信、聞即信とするから、観と聞とを対比して考察することができる。

エ)そこで、高祖の御文を伺うに、「聞」について、「聞」といふは、衆生、佛願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを聞といふなり(Ref「信巻 牒釈(でっしゃく)五項」註 P251)となさる一方で、「きくといふは、本願をききて疑ふころなきを「聞」といふなり。また、きくといふは、信心をあらはす御のりなり」(Ref『一念多念文意』註 P678)とお示しである。

オ)両者を対比すると、疑蓋無雜の共通項を除くと「佛願の生起本末を聞くこと」が浮かび上がる。してみれば、疑蓋無雜の前提となる「聞」の前段プロセスこそは、「観」の「願力をこころにうかべみる」プロセスと軌を一にするものがあるのではないであろうか。

カ)してみれば、「観」と「信」とは、安心次元に限定して“**体一異名**”と片付けるのではなく、衆生のプラクティスに関わる起行次元プロセスを浮かび上がらせて(見える化して)現代社会への弘願のみ教え伝道に資する教学的可能性を発掘することは、起観生信の今日的課題の一つではないかと窺うものであるが如何でありましょうや。

(二) 観行生長信心(後続観・後続信)の義(鮮妙師等)

【題意】

本義は、信心獲得後に、「後続の観行」によって、非意業の信体を行者の意業の信相に発生せしめ、その信心(後続の信心)を生長(増長)させる義である。

【出拠】(共通分を除く)

『論註』の「偈は己心(自らの領解、信心)を申ふ、よろしく帰命といふべし。論は偈の義を解す。汎く礼拝を談ず。彼此あひ成じて義においていよいよ顕れたり(Ref 七註 p53)」及び「この十七種の莊嚴成就を観ずれば、よく眞実の浄信を生じて、必定してかの安樂仏土に生ずることを得(Ref 七註 p125)」の文意は、後続の生長信心の意であるとする。

【釈名】

「観」は、願力を心に浮かべ想う義(観照と略称)、意業智業の観である。

「生長」は、発生したものが漸次に長ずる意である。

【義相】

(一) 後続観立論の趣旨

ア)「我一心」そのものを後続の一心であるとし、「観彼世界相」から「示仏法如佛」についても後続観として立論するものである。

イ)「観彼世界相」等の「後続の観見」を起こして帰敬頌の「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」の一心願生を「後続の信心」として生長させることを表す。

「我一心」とは、天親菩薩自督の詞なり。いふところは、無碍光如来を念じて安楽に生ぜんと願ず。信心相續して他想(=自力疑心)、間雑することなしとなり(Ref「行巻」註 P155-156、「論註」(上)七註 P52)と一連に示されているからである。

(二)後続観・後続信の意義

ア)信後味道の観に通ずる(Ref 善讓 p63)。

イ)信後の観によって非意業の信体を意業の信相に発生せしめ、その信心を増長させるのである。一日百丈生長する好堅樹の喩えがこれに当たる(Ref「論註」七註 p134)。

【論点:観行生長信心義における懸念について】

Q 三一問答の釈義に照らして「一心」を後続の信心に限るのは妥当性を欠くのでは？

A 心々相續して他想間雑することなし。何ぞ一心の偈に背かん(Ref P63)より、後続の信心として差支えない。之が本義立論の根拠であると云われている。

Q 「後続観・後続信の義」に徹した背景についての考察

A ア)「うかべしんじる、うかべたのむ」等の詞がないから、「起観即生信」は、採り難い。

A イ)「うかべみる、うかべおもふ」の「うかべ」が意業(Ref p25)であり、「観行発生信心」では、「起観」に自力の入りうる懸念があるが、後続ならその心配がない。

A ウ)初起観導入は、行を機の次元で語る失は免れないところ、「後続観・後続信の義」だけはその懸念がない、これが今一つの理由かと窺われる。

(三)観行発生信心(観行生信)の義(僧鎔、善讓師等)

【題意】

本義は、『論註』の願偈大意の「観見願生」を受けて、三嚴二十九種の浄土の莊嚴相を観見し不虛作の本願力(Ref「論註」「不虛作住持功德成就」七註 P131)に観達(これを徳相観という)する(非意業の信心を発生する)義である。

【出拠】(共通分を除く)

『論註』「利行満足章」、「証巻引文の「智業とは、観察なり」(Ref 註 P204、七註 P150)

【釈名】

・「起観」とは、願力をうかべおもふの観行である(Ref 善讓 P63)。

・所観の佛徳が能観者に印現すること、衆生心中に願力が及んで、非意業の信心を発生する意であるとする(Ref p26)。

・「観」は観行発生信心の義では「初起観」を採るとする見方がある(Ref) (後述論点)。

- ・「生信」とは、真実信心を発生するを云う(Ref 善讓 P63)。
- ・所観の信心は、願生偈頌の「世尊我一心」の一心帰命の願生であるので、本願三心を合した初起の信心に当たる。
- ・「生」は、発生、不虛作の本願力に観達すれば、初起の信心を発生する意である。

【義相】

(一)観の性格

本義では「観」は、行者の意業に昇る智業(意業智業)だと捉える。

高祖の“うかべおもふ”も“うかべしる”も“うかべ”には意業の性格があり(Ref p25)、「智業とは、観察なり」(Ref『論註』「利行満足章」(七註 P150)「証巻引文」(註 p204)とあるからである。

(二)所観の仏徳印現の義の導入

ア)所観の仏徳が印現()し、衆生の意業水中に不虛作の願力が及んで非意業の信心(初起の信心)を発生するというロジックが採られる(Ref P26)。

但し、「印現」という用語は、高祖の用語にはないご論題特有の用語と解される。

イ)斯かるロジックが導入された背景は、「行者の意業がもとになって如来様から賜る非意業の信心が発生することはあり得ない。そのような観の構造は、方便観ではないのか」との論難を払拭するためであったかと窺われる。「印現」は、初起の一刹那に意業の観と之によりて発生したる非意業の信心が如何なる状態に於て同時に両立するやとの問いに於て導入された概念だったからである(Ref p26)。

(三)初起観の見方について

ア)生じた非意業の信よりして観を如実ならしむとして、このときの観を「初起観」とする見方(Ref 鮮妙 p75 上 4)がある。ついては、虞れ多くもそのご趣旨について伺わせて戴く。

イ)高祖は、大行出体積で行者の状態に言及されていない(註釈 P141)。したがって、結論を先に述べれば、初起観の導入は無用ではないかと末学は窺う。

初起の概念は優れて信の専権事項と窺われるからである。以下、考察する。

【初起観の要否判断についての考察】

ア)「大行釈」は、『論註』(下)の起観生信章の名号破満釈によられたもので、名義と相応する如実行であることを顕しているから、法の次元で捉えられる。

イ)信一念釈()の時剋の概念は、行一念釈()には見られない以上、初起は優れて機の受法に関わり、法である大行に導入する必然性を欠く。「行と信」とは、法と機の関係にある(Ref「補注 11」注 P1564)とされる所以である。りよって、起観生信の義相で、頻出する初起観の論議は、専ら、機に約しての通用であって本質論とは受け止め難い。

それ真実の信樂を案ずるに、信樂に一念あり。一念とはこれ信樂開発の時剋の極促を顕し、広大難思の慶心を彰すなり(Ref「信一念釈」註 P250)。

おほよそ往相回向の行信について、行にすなはち一念あり(中略)行の一

念といふは、いはく、称名の遍数について選択易行の至極を開顯す(Ref「行一念釈」注 P189)。

【論点:観行生信義における懸念】

(一) 仏徳「印現」の義導入により Trade Off (捨象) してきた課題

- ア)トレードオフとは、ある機能を選択する裏で他の機能の退化・喪失を招来する状況をいう。
- イ)本釈義では、意業智業の観行から非意業の信心を発生する論理を無事に成立させる為に、所観の仏徳が行者(の意業)に「印現」という概念が導入された(Ref p26)。
- ウ)これは、観行の意義を、いわば名号功德の一人働きに委ねた論理である。
- エ)これでは、折角の意業智業の観行自体の構造に目を塞いだと云われても致し方がない。
- オ)意業智業の観行から非意業の信心発生する上での困難を払拭するためには、何はさておき意業智業各々の意義を解明する義務が課されているのではないかと窺われる。

(二) 観行が意業であることの意義をどう解釈すべきか

- ア)まず、「観」の意業の性格をどう捉えるか。
- イ)大行は、如来行でありながら、無碍光如来の名を称する称名行が衆生に本願力回向されていると捉えられる(Ref 大行出体釈)。
- ウ)同様に、意業観行も往相回向されたものと解することによって、意業観行から何故に非意業信心が発生するかという困難を解決することができるのではないであろうか。
- エ)意業観行は、大行と同様に法の次元で取り扱うことになり、非意業信心はこれを受け止める機の側の疑蓋無雜の相と捉えれば足りるからである。
- オ)以て、「初起の信心よりして観を如實ならしむ」という論理は、最早無用となる。機の相状を前提に法である観の相状を云々する必要はないからである。
- カ)されば、生信前後で法である観に相違は生じようがない。
- キ)蓋し、証巻の往還結釈に「大涅槃を証することは願力の回向によりてなり。(中略)ここをもって論主(天親)は広大無碍の一心を宣布して、あまねく雜染堪忍の群萌を開化す。宗師(曇鸞)は大悲往還の回向を顯示して、懇に他利利他の深義を弘宣したまへり。仰いで奉持すべし、ことに頂戴すべしと」(Ref「証文類」往還結釈)とある通り、弘願のみ教えは、本願力回向の法義だったのだ。

(三) 観行が智業であることの意義をどう取りあげるべきか

- ア)依正二十八句の観は、別しては「清淨功德不虛作住持功德」を見るにある(Ref 是山師 P128(132))とあり、『淨土論』の偈文には「観」が二箇所に見られ、観すべき客体は「観彼世界相」という清淨功德(智慧)と「観仏本願力」という慈悲であり、斯かる意味をもった不虛作住持功德の観を「願力をこころにうかべみる」とある(Ref P383)。
- イ)また、「観」は、意業智業である(「智業とは觀察なり」Ref『論註』「利行満足章」七註 P150、『ご本典』「証巻引文」註 P204)と示されてある。そうだとすれば、

ウ)「観」が智業であることの意義を生かさなければならぬ。ではどう頂戴すればよいか。
 E)端的に、本願力回向の智業だったと頂戴すればよかつたのではないであろうか。

ウ)蓋し、弘願は文字通り聖者の止観を云うものでは勿論なく、願力回向の行を疑いなく頂戴するとき摂取不捨の利益に与る上で、願力をここに浮かべ見る観行こそは、ここでいう智業に相当するのではなかつたかと窺われる。

カ)智慧の働きについて高祖はどのようにご覧遊ばしたか。ご和讃に、次の様に謳われている。

(35)智慧の念仏うることは

法蔵願力のなせるなり

信心の智慧なかりせば

いかでか涅槃をさとらまし(正像末和讃 35)

「智慧の念仏とは、弥陀のちかひをもって仏になるゆゑに、智慧の念仏とまうすなり」

「信心の智慧とは、弥陀のちかひは智慧にてましますゆゑに、信ずる心の出てくるは智慧の起こるとするべし」(35,34 異本ご左訓)。

念仏も信心も既に如来回向の智慧の働きとして賜っていたのだった。

ウ)してみれば、所観の功德印現の概念を導入下さった先哲のご苦勞の跡は尊びつつも、観の意業智業を願力回向の智慧の念仏の次元で頂戴するならば、意業智業の観行から非意業の信心が発生する上で何らの困難も存しなかつたものと窺うことができる。

五、最後に

ア)日本仏教の海外伝道は、鈴木大拙師による禅と浄土真宗では妙好人の紹介がある。前者はプラクティスとして異教徒異民族に浸透するに効果があった。後者は、弘願のみ教えが人の上に現に生きている証拠と捉えられる。

イ)妙好人の生き様が実践をよりどころとしている以上は、現代社会、異教徒異民族に弘願のみ教えを果敢に伝道していく上での可能性を確実ならしめんが為には、他力の行者のプラクティスに相当するプロセスの解明、衆生往生の因果を成立して下さる如来の本願力をうかべみる「観」の起行概念の解明こそは、今日焦眉の的ではないかと窺うものである。

ウ)現代社会・異民族・異教徒に弘願のみ教えをお伝えする手立てについてあれこれ探求しております。諸先生・諸先輩方には忌憚なきご指導を戴ければ幸いです。合掌。

六、出拠(凡例)註 註釈版、七註 七祖註釈版

真宗叢書二巻『真宗百論題集(下)』第二十七「起観生信」、

真宗叢書別巻 是山和上「往生論註講義」(巻下)「起観生信」

雲山龍珠『宗要安心論題』「起観生信」

梯 実圓 平成10年安居本講『一念多念文意講讃』「不虛作住持功德釈」P377

相馬一意「往生論註購読」

安藤光慈『教行信証』における天親教学の受容、『顕浄土真実教行証文類』の背景と展開 P73)。

以上